

Jリーグの観客動員数に関する研究

Study about the Attendance of J-League

1K05B028

内田 大三

指導教員

主査 原田宗彦先生

副査 間野義之先生

1、背景

Jリーグは「2010 年の年間総入場者数 1,100 万人（イレブンミリオン）」を発表し、この目標を達成するためには各チームの入場者の増加が求められている。また、各チームがそれぞれの現状の総入場者数の 20%増を実現することで経営状況も改善・安定化が実現すると考えられる。比例関係にあると考えられるスタジアム来場者と入場料収入が増えることでスポンサー企業の業績悪化によるチームにもたらす経営リスクの軽減が考えられる。

2、研究目的

本研究ではJリーグの試合会場に訪れる来場者の数を規定する要因や、試合開催時における条件の違いによって生じる平均来場者の違いを明らかにすることを目的としている。「イレブンミリオン」プロジェクトの達成および、観客動員数が停滞しているチームの現状打破に僅かながらでも貢献することができるのであれば本望である。

3、研究方法

大宮アルディージャ、ジェフユナイテッド千葉・市原、鹿島アントラーズ、清水エスパルス、ガンバ大阪の 5 チームを研究対象とした。従属変数（＝結果）を「観客数」、独立変数（原因）に「観客数を規定する要因」からなるモデルを作成し、SPSS for Windows を用いて重回帰分析を行った。試合毎に異なる 15 つの条件（〇〇の有無）それぞれの間に平均観客動員数の差が表れているのかを検討するため、従属変数を「観客動員数」、独立変

数を「平均観客動員数に差が表れると考えた各要因」とし、SPSS for Windows を用いて独立したサンプルのt検定を行った。試合が開催された曜日やキックオフ時間の違いによって平均観客動員数の差が表れているのかを検討するため、従属変数を「観客動員数」、独立変数を「平均観客動員数に差が表れると考えた各要因」とし、SPSS for Windows を用いて一元配置分散分析を行った。

4、結果

観客動員数を規定する要因として、「会場収容人数」と「最寄駅からの最短アクセス（分換算）」、「A チームの前年度順位」と「A チームの前年度大会優勝数」、「A チームの直近の日本代表戦に出場した選手」と「チケットの種類数」が有意な正の影響を与えていた。また、11 つの項目が平均観客動員数に有意な差を与える傾向が見られた。曜日やキックオフ時間においては、平日に開催された試合の平均観客動員数が少なかった傾向が表れた。

5、考察

リーグ戦の全試合の対戦相手が前年度に上位成績を収めたチームや、日本代表選手を有しているわけではないが、該当するチームとの対戦を控えるチームは試合の告知活動において対戦相手の魅力をより有効活用することで観客動員数の増加に好影響を与えられると考えられる。試合開催条件の違いによって表れた平均観客動員数の差と、平日に開催される試合では観客動

員数に負の傾向が見られることは想定内であった。

6、結論

週末に開催され、試合会場の最寄駅からの距離を無料送迎バスで極力短くし、OOデーが開催される試合である。

また、ダービーマッチや対戦するどちらかのチームに J1 優勝の可能性がある、同じホームタウンのプロ野球チームが本拠地で試合を開催しない日や対戦チームの前節の試合がテレビ放送されていた試合はより多くの観客動員数が見込まれる。試合を告知するにあたっては対戦チームの魅力を有効活用することが有効である。また、チケット

の値段を変更せずに、試合観戦だけではなく様々な価値が付随しているチケットを用意することが望まれる。

今回分析した 5 チーム全体の観客動員数を規定する要因を重回帰分析において算出したが、自由度調整済み決定係数 (R^2) も .494 であり、要因の半分未満しか導き出せていないことから、設定した独立変数の量と質の双方に課題が残った。量に関しては、独立したサンプルの t 検定や一元配置分散分析を行った項目を、ダミー変数を用いることで重回帰分析の項目を増やすことができたことが悔やまれる。質に関しては、より多くの先行研究の探索や、新たな変数を考えだすことが必要であった。